

な つ み

夏美とルーク、 そして Kiri



か ひと しつびつしゃ たはた みつえ
書いた人／執筆者：田畑サンドーム光恵

ひと しつびつきようりよくしゃ に し お さ ち こ
てつだってくれた人／執筆協力者：西尾佐知子

しゃしん ていきよう ひと とうきようと まえかわしろろう
写真を提供してくれた人：東京都の前川史郎さん

まえかわ とき はなし
(前川さんは、ニュージーランドにいらっしゃった時、このお話の
いぬ しゃしん ふうけい しゃしん と
モデルになった犬の写真や、風景の写真を撮られました。)

なつみ
夏美とルーク、

そして Kiri

なつみ どう じん なつみ にほん う
夏美のお父さんは、ニュージーランド人です。でも、夏美は、日本で生まれまし
かあ にほんじん なつみ う とき どう かあ にほん す
た。お母さんが日本人で、夏美が生まれた時は、お父さんとお母さんは日本に住ん
でいたからです。

なつみ さい かげつ とき さんにん ふるさと かえ き
夏美が1歳3ヶ月の時、三人は、お父さんの故郷ニュージーランドに帰って来まし
どう かあ ほう しぜん おお きょういく きび
た。お父さんとお母さんが、ニュージーランドの方が、自然が多いし、教育も厳し
なつみ くに かんが
くないので、夏美にとってはいい国だと考えたからです。

さんにん しゅと くるま ぶん ところ まち
三人は、首都のウエリントンから、車で40分の所にあるプクルアベイという町
ちい いえ か す はじ
に、小さな家を買って住み始めました。

となり いえ うら ぼくじょう ひつじ うし なんと
隣の家の裏は、牧場でした。羊がたくさんいて、牛も何頭かいました。そし
となり ひと じょうば す うま とうか
て、隣の人は乗馬が好きで、馬も6頭飼っていました。



ぼくじょう ひつじ
となりの牧場の羊たち

にほん そだ なつみ いえ ちか ぼくじょう めずら
日本で育った夏美にとって、家のすぐ近くに牧場があるのは、とても珍しかっ
たようです。なつみ ちい しゅうまつ とう いっしょ ちい
夏美は、まだ小さかったのですが、週末には、お父さんと一緒に小さ
ながづつ となり ぼくじょう い
な長靴をはいて、よく隣の牧場にハイキングに行きました。

ぼくじょう いちばんたか ところ ど かい みわた てんき
牧場の一番高い所からは、300度ぐらい、ぐるーっと海が見渡せます。お天気
ひ きれい うみ ま さお ひがし ほう とう しま
のいい日などは、とても綺麗です。海は真っ青で、東の方にはカピチ島という島が
み とう めずら とり たいせつ
よく見えます。このカピチ島は、ニュージーランドにしかない珍しい鳥が、大切
ほご じゅうよう しま しま きよか と ふね い
に保護されている重要な島です。この島には、許可を取った船しか行くことができ
ません。



となり ぼくじょう み うみ
隣の牧場から見えるきれいな海

ひだり ほう とう み
左の方にカピチ島が見える。

なつみ どうぶつ ぼくじょう きれい うみ みどり かこ
夏美は、動物のいっぱいいる牧場、綺麗な海、たくさんの緑に囲まれて、ニュ
せいかつ まんきつ
ージーランドの生活を満喫していました。

なつみ ちい ぼくじょう す ちい ぼくじょう
夏美のおじさんも、小さな牧場に住んでいました。とても小さな牧場ですか

かね ひつじ うし なつみ
ら、あまりお金はもうかりません。でも、羊も、牛も、にわとりもいます。夏美が
さんさい とき とう かあ はじ なつみ ぼくじょう つ い
三歳くらいの時、お父さんとお母さんは、初めて夏美をおじさんの牧場に連れて行
ってくれました。

どうぶつ す なつみ ひとめ ぼくじょう こい
動物が好きな夏美は、一目でおじさんの牧場に恋をしてしまいました。

かえ やす お かえ ひ なつみ い
「おうちに帰りたくない。」お休みを終えて帰る日、夏美はそう言って、ずっと
な
泣いていました。

なが やす とき
それから、クリスマス、イースターなどの長いお休みの時は、いつもおじさんの
ぼくじょう あそ い
牧場に遊びに行くようになりました。

とし なつみ とう ぼくじょう あそ い なつみ
ある年、夏美とお父さんだけが、牧場に遊びに行きました。そこで、夏美は、と
はなし き
てもショックな話を聞いてしまいました。

おく はな
おじさんと、おじさんの奥さんが、こう話していたのです。

ぜんぜんやく じゅう う ころ かわ す
「Kiri は、全然役にたたないから、銃で撃ち殺して、川に捨ててしまおうか。」

かわいそう しごと いぬ わけ
「そうだな、可哀想だけど、仕事をしない犬をおいておく訳にはいかないから
な。」

なつみ しん
「！！！」夏美は、信じられませんでした。とてもショックでした。

Kiri というのは、とても可愛いファーム・ドッグです。おじさんの牧場には、5
匹のファーム・ドッグがいましたが、夏美の一番
のお気に入り、Kiri だったのです。



ファーム・ドッグというのは、牧場で色々な
仕事を手伝う犬のことです。牧場の多いニュー
ジーランドでは、約20万匹のファーム・ドッグ
が働いています。ファーム・ドッグはとても頭のいい犬
で、色々なことができます。

とてもおとなしい
Kiri

羊を一つのパドック（牧場の一区画）から、別のパドックに移動させる時、フ
ーム・ドッグは、羊が逃げないように、全部の羊をグループにして移動させる
ことができます。

実は、羊はとても怖がり、頭が悪いのです。移動の時なども、どうしていいかわ
からないので、すぐに逃げようとします。一匹が逃げると、頭の悪い羊は、何も
考えずにその逃げていく羊について行こうとします。

頭の悪い何十匹もの羊を、人だけで移動させることは出来ません。だから、フ
ーム・ドッグは、ニュージーランドの牧場にはなくてはならない存在なのです。

でも、ファーム・ドッグの中にも、よく仕事ができる犬と、できない犬がいま
す。ファーム・ドッグは、牧場を経営している家の人にとっては、ペットではあり
ません。ビジネスの道具です。仕事のできない犬も、ごはんは食べます。だから、
仕事のできない犬には、無駄なお金がかかるのです。

なつみ ぼくじょう かねも しごと
夏美のおじさんの牧場は、あまりお金持ちではありません。だから、仕事のできないファーム・ドッグはおいておけないのです。



しごと
仕事をするファーム・ドッグ

Labelled for reuse image: <https://bit.ly/2rVrgoe>

Copyright of image (Author): Scot Campbell

あたま とう いぬ かあ いぬ う あたま いぬ
Kiri は、頭 のいいお父さん犬とお母さん犬から生まれました。頭 のいい犬で
ほんとう ぼくじょう しごと じょうず あか いぬ
す。本当なら、牧場の仕事も上手にできるはずですが、でも、Kiri は、赤ちゃん犬だ
とき ひと そだ ひと
った時、とてもいじわるな人たちに育てられました。その人たちは、Kiri にちゃん
ぼくじょう しごと おし おお こえ け
と牧場の仕事を教えず、すぐに大きな声でどなったり、蹴ったりしていたそう
す。

み なつみ かわいそう ひと
それを見た夏美のおじさんは、Kiri が可哀想で、そのいじわるな人たちから Kiri
か と う ぼくじょう
を買い取ったのです。でも、ファーム・ドッグは、生まれてすぐにしっかりと牧場
しごと おし
の仕事を教えてもらわなければ、いいファーム・ドッグにはなれません。Kiri が

なつみ ぼくじょう き とき さいちか
夏美のおじさんの牧場に来た時は、もう2歳近くになっていました。だから、Kiri
ぼくじょう しごと おし おそ
に牧場の仕事を教えるのは、遅すぎたのです。

なつみ ぼくじょう あそ い はじ ころ みみ
夏美がおじさんの牧場に遊びに行き始めた頃、Kiriには、「耳なし」というあだ
な なに い い しごと い
名がついていました。「何を言っても、言うとおりに仕事が出来ない、こっちの言
こと き みみ い み な
う事を聞く耳がない。」という意味のあだ名です。

なまえ い み にほんご きり け いろ
Kiriの名前の意味は、日本語の「霧（Mist）」から来ています。Kiriの毛の色
きり あわ きれい しろ はいいろ さいしょ なまえ
が、まるで霧のような淡い綺麗な白と灰色だったので、最初は「Mist」という名前
はな なつみ えいご なつみ
にしようと話していたそうです。でも、夏美のおじさんが、英語ではなく、夏美の
かあ にほんご にほんご なまえ
お母さんにMistを日本語にしてもらって、わざと日本語の名前にしました。

あさ きり かん いぬ
Kiriは、朝の霧のように、ふわーとした感じのとてもやさしい犬でした。

しゅるい いぬ め ひつじ こわ しごと
Kiriは、Eye Dogという種類の犬で、目で羊を怖がらせて仕事をするファーム・ドッグでした。だから、あまり吠えません。とても静かで、大きな綺麗な目で
ほ しず おお きれい め
じっと周りを見えています。

きれい おとな なつみ いちばんず
やさしくて、綺麗で、大人しいKiriのことを、夏美が一番好きだったのです。

わたし だいず ころ かわ す
『私の大好きなKiriが、おじさんに殺されて、川に捨てられる!!!』

なつみ おおいそ とう い はなし
夏美は、大急ぎでお父さんのところに行って、この話をしました。そして、「お
とう つ かえ たす
父さん、Kiriをおうちに連れて帰ってあげようよ。Kiriを助けてあげようよ！」

なつみ とう いぬ だいす とう
夏美のお父さんも、犬が大好きです。でも、お父さんは、「う~~~~ん」と
こま ようす かあ
とても困った様子です。「でも、うちは、お母さんが。。。」

じつ なつみ かあ どうぶつ にがて
実は、夏美のお母さんは、動物がとても苦手だったのです。だから、「ペットは
ぜったい い
絶対ダメ！」といつも言っていました。

なつみ とう かあ せつとく
それでも、夏美とお父さんは、おじさんに、「ちゃんとお母さんを説得して、Kiri
むか く ころ たの こ ぼくじょう いえ かえ
を迎えに来るから、それまで Kiri を殺さないで」と頼み込んで、牧 場から家に帰
りました。

いえ かえ なつみ ひっし こわ おち き かあ
さあ、家に帰った夏美は必死です。ちょっと怖いけれど、思い切ってお母さんに
ねが
お願いしました。

かあ
「お母さん。。。」

なに
「何？」

ぼくじょう きれい おち
「おじさんの牧 場の Kiri って、綺麗だと思わない？」

いぬ いぬ ほ ほか いぬ
「ああ、あの犬。あの犬は、あんまり吠えないし、他の犬よりましね。」

おとな かわい し
「ね、そうだよ。大人しいよね。可愛いよね。だから、死んだら、かわいそう
だよ。」

いぬ びょうき
「あの犬、病気なの？」

ちが じゅう う かわ
「ううん、違うの。おじさんが、『Kiri は仕事ができないから、銃 で撃って、川
す
に捨てる』って。」

ざんこく
「え、ほんと。それ、すごいかわいそうじゃない。残酷すぎる。」

「だからね。。。」

「ちょっと！！　もしかしたら、あの犬^{いぬ}をうちで飼^かうつもり？」

「おねが〜〜〜〜い！おねがい、おねがい、おねがい！」

夏美^{なつみ}のお母^{かあ}さんは、かなり犬^{いぬ}が苦手^{にがて}でした。でも、夏美^{なつみ}とお父^{とう}さんが必死^{ひっし}に頼^{たの}むので、仕方なく Kiri を自分^{しかた}たちの家^{じぶん}に引き取^{いえ}ることにしました。「ファーム・ドッグ^{いぬ}は家^{なか}の中^いに入れなくてもいい」、と言^いわれたので、「それなら、Kiri をうちで飼^かうのを許^{ゆる}してあげるわ。」と OK してくれたのです。

Kiri は、おじさんのトラックに乗^のって、犬小屋^{いぬごや}と一緒^{いっしょ}に夏美^{なつみ}の家^{いえ}にやってきました。

ずっと牧場^{ぼくじょう}しかない田舎^{いなか}に住^すんでいた犬^{いぬ}だったので、町^{まち}に來た最初^{さいしょ}の頃^{ころ}、Kiri は、何でも怖^{なん}がっていました。たくさんの人^{ひと}がいるし、たくさん車^{くるま}も走^{はし}っているし、犬^{いぬ}にも色々^{いろいろ}な種類^{しゅるい}の犬^{いぬ}がいます。

家^{いえ}の近く^{ちか}には、学校^{がっこう}もあつて、子ども^こたちの大^{おお}きな声^{こえ}が聞^きこえてくるし。いつも怖^{こわ}いので、Kiri のしっぽは、元氣^{げんき}なく下^{した}に向^むかってたら〜んと垂^たれていました。それを見^みて、夏美^{なつみ}とお父^{かあ}さんは、Kiri が可哀^{かわい}想^{そう}で、毎日^{まいにち}一生^{いっしょう}懸命^{けんめい}散歩^{さんぽ}に連^つれて行^いってやさしく世^せ話^わをしました。

犬^{いぬ}があんまり好^すきじゃないお母^{かあ}さんも、Kiri のことをもう一人^{ひとり}の子^こどもと思^{おも}って、晩^{ばん}ごはんをあげたり、臭^{くさ}くなってきたら体^{からだ}をシャンプーしてあげたりしました。

Kiri は、少し^{すこ}ずつ町^{まち}の生活^{せいかつ}に慣^なれ、元氣^{げんき}になっていきました。

でも、Kiri が最後まで好きになれなかったことが一つあります。それは、イギリスから伝わるニュージーランドの変なお祝いです。

そのお祝いは、「ガイ・ファークス（Guy・Fawkes）の夜」です。ガイ・フォークスというのは人の名前です。この人は、仲間と一緒に、1605年にイギリスの王様ジェームズ一世を殺そうとした人です。でも、爆弾をいっぱい用意して、準備していたのですが、計画を実行する前に警察につかまってしまいました。

変な話ですが、イギリスからニュージーランドに移住してきた人々は、11月5日に、このイギリスで起きた「昔の失敗したテロ」をお祝いするという習慣を始めました。そして、11月5日頃だけ、「花火をあげていい日」にしようと決めたのです。ガイ・フォークスたちが爆弾を使ってお城を爆破しようとしていたから、それにちなんで、「花火」をあげる日にしたんでしょうか？？？

そんな訳で、今でもニュージーランドでは、11月5日頃になると、沢山の家で花火をします。そんな夜は、あちこちから「ボン、ボン」と大きな花火の音がなんじかんも聞こえてきます。



ガイフォークスの^{かめん}仮面のイメージ

Labelled for reuse image: <https://bit.ly/2GxzZ4x>

Copyright of image (Author) : Vectorportal

Kiri は、この「ガイ・フォークスの夜」をととても^{よる}怖^{こわ}がりました。もともと、Kiri はすごい怖^{こわ}がり屋^やさんでした。それに、犬^{いぬ}は人間^{にんげん}の7倍^{ばい}の鋭^{するど}さ^{おと}で音^きを聞^きけるので、き^{はなび}っと、花火^{おと}の音^{みみ}は、Kiri の耳^{おと}にはものすごい音^きに聞^きこえたのでしょ^う。

まち^き 町^{さいしよ}に来て、最初^{とし}の年^{よる}のガイ・フォークスの夜、花火^{はなび}の音^{おと}が聞^きこえ始^{はじ}めた時^{とき}、Kiri は、あんまり怖^{こわ}いのでどこか^{なつみ}に^{かあ}いなくな^なってしま^いいました。夏美^{なつみ}とお母^{かあ}さん^はは、Kiri のこと^{なんじかん}を何時間^{さが}も探^{さが}さなければなり^ませ^せん^でした。

ねんめ 2年目^{ねんめ}からは、ガイ・フォークスの夜^{よる}だけ、Kiri は家^{いえ}の中^{なか}に入^{はい}っていいこと^{こと}になり^{なり}ました。花火^{はなび}の音^{おと}を聞^きいて、ブルブル震^{ふる}えている Kiri に、夏美^{なつみ}は毛布^{もうふ}を^をかけ^{かけ}てあ^あげ^げて、ず^{よこ}っと横^{いっしよ}に一緒^{すわ}に座^{すわ}ってあ^あげ^げました。

なつみ 夏美^{なつみ}が5歳^{さい}にな^{とき}った時^{とき}、夏美^{なつみ}の弟^{おとうと}のルーク^うが^う生ま^うれました。ルーク^うが^う生ま^うれて^うから、夏美^{なつみ}はルーク^うの方が可^ほ愛^{かわい}いので、あ^あまり Kiri と遊^{あそ}ばな^{あそ}くな^{あそ}ってしま^{あそ}い^{あそ}まし^{あそ}た。だから、お父^{とう}さん^いが Kiri の一^{いちばん}番^{ばん}の友^{とも}だち^{とも}にな^{とも}りました。

なつみ ちゅうがっこう こうこう とも あそ べんきょう
夏美は中学校、高校とあがるにつれて、友だちと遊んだり、勉強やスポーツを
いそが あそ
したり、忙しくなっていき、どんどん Kiri と遊ばなくなりました。

なつみ か おとうと おお しんゆう
でも、夏美に代わって、弟のルークが大きくなるにつれて、Kiri の親友になっ
やさ いぬ
ていきました。Kiri はとても優しい犬だったので、わんぱくなルークが、Kiri の
せなか の かお いえ にわ
背中に乗ったりしても、いやな顔をしませんでした。ルークと Kiri は、家の庭で、
いちにちじゅういっしょ あそ
よく一日中一緒に遊んでいたものです。

おもしろ しゅみ となり いえ み は
Kiri には、とても面白い趣味がありました。「隣の家のにわとりを見張ること」
なつみ いえ にわ となり いえ にわ あいだ へい すこ すきま
です。夏美とルークの家と隣の家との間には、塀がありますが、少し隙間
となり いえ にわ み となり いえ
があります。そこから、隣の家を見ることができます。隣の家は、にわとり
わ か
を3羽飼っていました。

もともと ひつじ み は いぬ なつみ いえ き ひ
Kiri は元々Eye Dog で、羊をじっと見張る犬だったので、夏美の家に来た日か
まいにちか へい よこ すわ となり いえ み は
ら、毎日欠かさず、塀の横に座って、隣の家のにわとりを「見張っていました。」
なつみ いえ あそ き ひと へい よこ すわ となり いえ み は
夏美の家に遊びに来た人はみんな、塀の横に座って、隣の家のにわとりを「見張っ
おもしろ おも
ている」Kiri のことを、とても面白いと思ったようです。

なつみ だいがく にゅうがく こうこう にゅうがく とし いっか しゅと
夏美が大学に入学し、ルークも高校に入学する年、一家は首都のウエリントン
ちゅうしん ひ こ ふたり がっこう かよ べんり
の中心に引っ越しました。二人の学校に通うのに、便利だからです。もちろん、
にわ いえ か
Kiri のために、庭のある家を買いました。

ルークはもう 15歳さいになっていたのですが、Kiri のことをとても可愛かわいがっていました。
散歩さんぽに連れて行くのも、犬小屋いぬごやをそうじするのも、ルークの仕事しごとでした。

ある日、お母さんははが言いました。「ねえ、Kiri のお腹なか、はれてない？」

みんなが見てみると、Kiri のお腹なかの一箇所いちかしよがかなりはれています。すぐにお父さんとうがお医者さんいしやに連れて行きました。

Kiri の体からだには、3つの癌がんがあることがわかりました。もう 15歳さいでしたし、すごいおばあちゃんなので、いつ死しんでも仕方しかたがないので手術しゅじゅつはしませんでした。

お医者さんいしやは、「食べ物たを食べられなくなったら、可哀想かわいそうなので、安楽死あんらくしさせましょう。」と言いいました。

最後さいごの一ヶ月いっかげつ、Kiri はとても痛いたかったんだと思います。大好きなルークの後うしろを、
歩あるいてついていくのですが、しっかり歩あるけないのです。それでも、一生懸命いっしょうけんめいルーク
の後うしろを歩あるいていたのが、皆みなの心こころに残のこっています。

ルークは、「Kiri はまだまだ大丈夫だいじょうぶ。元気げんきだよ。ごはんもちゃんと食たべてるよ。
絶対ぜったい、安楽死あんらくしなんかさせない！」と言いっていました。

でも、ある日、お父さんははに、「Kiri をお医者さんいしやに連れて行って、安楽死あんらくしさせてあげて。」と言いったのは、ルークでした。

「昨日きのうから、もうずっと犬小屋いぬごやから出でてこない。ごはんも食たべてない。きつとす
ごくつらいんだ。もう可哀想かわいそうだよ。」

Kiri ^{いしや} が ^い お医者さん ^ひ に行く ^{あさ} 日の朝、^{なつみ} 夏美と ^{がっこう} ルークは、^い 学校 ^{まえ} に行く前、^{なが} 長い ^{あいだ} 間、Kiri
に「^{だいず} 大好き ^{ほんとう} だよ。本当に、^{いま} 今まで ^{だいず} ありがとう。大好き ^く だよ。」と ^{かえ} 繰り返し ^{はな} 話しかけ
ていました。



^{ねん} あれから ^た 12年 ^{なつみ} が経ちました。夏美はも
^{さい} うすぐ ^{しごと} 30歳 ^{べんごし} になります。仕事は弁護士で
^{いま} すが、今は ^{すこ} 少し ^{やす} お休み ^{どうし} しています。どうし
てかって？

^{なつみ} 夏美 ^{かあ} はもうお母さん ^{なまえ} になっているからで
す。夏美の ^{むすめ} 娘 ^{ことし} は、^{さい} 今年 ² 2歳 ^{なまえ} です。「はな」という名前 ^{なまえ} です。

^{いま} 今、^{きせつ} 季節 ^{なつ} はクリスマス。ニュージーランド ^{いちねん} は夏 ^{いちばん} で、一年 ^{きせつ} で一番 ^{なつみ} いい ^{なつみ} 季節 ^{ぼくじょう} です。
夏美 ^{なつみ} と ^{なつみ} だんな ^{ぼくじょう} さんの ^{なつみ} つばさ ^つ さんは、^い はな ^い ちゃん ^い を ^い 夏美 ^い の ^い おじ ^い さん ^い の ^い 牧 ^い 場 ^い に ^い 連れ ^い て ^い 行 ^い っ
^{おも} こう ^{はじ} と思 ^{はじ} いました。はな ^{ぼくじょう} ちゃん ^{ぼくじょう} にとって、^{はじ} 初 ^{ぼくじょう} め ^{ぼくじょう} て ^{ぼくじょう} 行 ^{ぼくじょう} く ^{ぼくじょう} 牧 ^{ぼくじょう} 場 ^{ぼくじょう} です。

^{くるま} 車 ^{じかんはし} を ^{ぼくじょう} 5時間 ^つ 走 ^つ らせ、^{ぼくじょう} や ^つ っ ^つ と ^つ 牧 ^つ 場 ^つ に ^つ 着 ^つ き ^つ ま ^つ した。^{どうぶつ} は ^{どうぶつ} な ^{どうぶつ} ちゃん ^{どうぶつ} は、^{どうぶつ} た ^{どうぶつ} く ^{どうぶつ} さん ^{どうぶつ} の ^{どうぶつ} 動 ^{どうぶつ} 物 ^{どうぶつ}
^み を ^み 見 ^み て ^み ワ ^み ク ^み ワ ^み ク ^み し ^み っ ^み て ^み います。

おじ ^{なつみ} さん ^い が、^{なつみ} 夏美 ^み に ^み 言 ^み い ^み ま ^み した。「^{なつみ} 夏美 ^み、^み ち ^み ょ ^み っ ^み と ^み い ^み い ^み も ^み の ^み 見 ^み せ ^み て ^み や ^み ろ ^み う。」

おじ ^{なつみ} さん ^{なつみ} は、^{なつみ} 夏美 ^{なつみ} た ^{なつみ} ち ^{なつみ} を ^{なつみ} ファ ^{なつみ} ァ ^{なつみ} ム ^{なつみ} ・ ^{なつみ} ド ^{なつみ} ッ ^{なつみ} グ ^{なつみ} の ^{なつみ} い ^{なつみ} る ^{なつみ} パ ^{なつみ} ド ^{なつみ} ッ ^{なつみ} ク ^{なつみ} へ ^{なつみ} 連 ^{なつみ} れ ^{なつみ} て ^{なつみ} 行 ^{なつみ} き ^{なつみ} ま ^{なつみ} した。

ファ ^{むかし} ァ ^{むかし} ム ^{むかし} ・ ^{むかし} ド ^{むかし} ッ ^{むかし} グ ^{むかし} は ^{むかし} 昔 ^{むかし} の ^{むかし} よ ^{むかし} う ^{むかし} に、^{むかし} 5 ^{むかし} 匹 ^{むかし} い ^{むかし} ま ^{むかし} した。^{むかし} そ ^{むかし} の ^{むかし} 一 ^{むかし} 番 ^{むかし} 後 ^{むかし} ろ ^{むかし} の ^{むかし} ファ ^{むかし} ァ ^{むかし} ム ^{むかし} ・ ^{むかし} ド ^{むかし} ッ ^{むかし} グ ^{むかし}
^{なつみ} を ^{なつみ} 見 ^{なつみ} た ^{なつみ} 夏 ^{なつみ} 美 ^{なつみ} は、^{なつみ} 自 ^{なつみ} 分 ^{なつみ} の ^{なつみ} 目 ^{なつみ} が ^{なつみ} 信 ^{なつみ} じ ^{なつみ} ら ^{なつみ} れ ^{なつみ} ま ^{なつみ} せ ^{なつみ} ん ^{なつみ} で ^{なつみ} した。

「Kiri!!! Kiri だ！、ママ、パパ、Kiri だよ！」

なつみ さけ まえ いぬ み よ むすめ
夏美が叫ぶ前に、その犬を見て、「Kiri」と呼んだのは、娘のはなちゃんでした。いつも Kiri の写真を見ていたからです。

おじさんは、^{せつめい}説明してくれました。

「こいつは、Kiri の^{まご}ひ孫だよ。Sky って言うんだ。そっくりだろう？ Kiri と^{いっしょ}一緒に、^{おとな}とっても大人しい、やさしいやつだよ。」

クリスマスのお休みを終えて、^{やす お なつみ}夏美とつばささん、そして、はなちゃんが^{まち かえ}町へ帰る日です。はなちゃんは、^{ひ おおごえ}大声でこういいました。

「ママ、ママ、Sky をはなのおうちに連れて帰っていい？」

なつみ ふ かえ かお み
夏美は、振り返って、おじさんの顔を見ました。おじさんは、ウインクして、

「^{つ かえ}連れて帰ってやるといいよ。ルークもびっくりするぞ。」

こうして、Kiri にそっくりな Sky が、^{なつみ す}夏美とルークの住むウエリントンにやって来ました。Sky を見た時のルークの^{き み とき おどろ い}驚きようは言うまでもありません。とても嬉しそうでした。

^{むかし}昔 ^{おうさま}プロシアの王様 ^{だいおう}フレデリク大王が、「犬は人間の一番の親友」と言ったそうです。

なつみ じんせい しんゆう なんばい す ば
夏美とルークの人生も、Kiri という親友がいたことで、何倍も素晴らしいものになりました。ありがとう、Kiri!

 なつみ むすめ たくさん しあわ
さあ、これからは、夏美の娘 のはなちゃんが、Sky から沢山の 幸 せをもらうの
でしょうね。

(3641語^ご)

